

作品タイトル 割引シール

著者名 梨田のりこ

あらすじ

スーパーマーケットでパートしている林子は、割引シールを商品に貼っていると貼らないでください、という客に出会った。定年退職した夫が買ってくるプリンやゼリーにはいつも割引シールが貼られている。娘の萌音は割引になっっているから買ってきたに過ぎない、と不機嫌になる。林子も夫の家族への思いはどこか割引されていると感じるのだった。

本編文字数 4990文字

半額、と書かれた割引シールをイカフライ弁当に貼ろうとしたときだった。

「貼らないでください」

懇願するような声に林子の手が止まった。振り向いた先には買い物カゴを持った女が立っていた。

「そのままの値段で買いたいです」

割引シールが林子の指先でひらひらと踊った。貼られるのを待っている客はいても、貼らないで欲しいと言われたのは初めてだった。

「かまいませんけど、貼った方がお買い得ですよ」

林子は戸惑いながら答えた。

「それはわかっているんです。私だって安い方が嬉しいし、でもそれだと困るんです」

言い淀んだところを見ると、何か事情を抱えているらしい。

「ではこのままお渡ししますね」

林子はイカフライ弁当を丁寧に手渡すと、彼女はホッとした表情を浮かべてカゴに入れた。次に迷うことなく割引シールが貼ってあるのり弁当をカゴに入れた。ふと林子と女の目が合った。林子はとつさに笑みを浮かべたが、彼女は無表情のまま静かに目を逸らし、レジに向かった。

林子は何気ないふりをして、レジに近い棚の隙間から女の様子を伺った。別々に会計をすませ、ふたつのエコバッグにそれぞれを入れた。彼女は足早に自動ドアを出ると、店の前の横断歩道を走って渡っていった。すぐに住宅街の中へと消えていった。

林子は割引シールを貼りに戻った。このシールを目当てにやってくるお客たちの視線を感じながら、慎重に商品に貼っていく作業を林子は密かに気に入っていた。赤と黄色の丸いシールは目立ちたがり屋なところが可愛らしく、どこか誇らしげにも見えた。半額、2割引、1割引と書かれたシールを貼っていくとき、不機嫌な心も機嫌が直るのだった。

林子がここで働き始めた頃は割引シール、もしくは値引きシールというものはなかった。賞味期限の切れた商品は次々に大きなゴミ箱に投げ入れられた。見た目はなんら変わらぬい総菜やおにぎり、十分に食べられる少しだけしおれた野菜や果物。林子は期限が切れた納豆やかまぼこも平気で食べるし、卵や牛乳だってそうだ。つくづくもったいないと思った。こっそりと持ち帰るパートもいたが、林子は見ないふりをしていた。

割引シールの登場によって、多くの商品が救出されることになった。ケースの一番手前に並ぶ割引シールの貼られた惣菜やおにぎり、弁当はそこだけライトの光りを集めたみたいに際立って見えた。今ではそのシールが貼られるのを待ち受けている客もいるくらいだ。素早くカゴに入れられると、林子は安堵と満足を覚えるのだった。

彼女が二十年近く働いているのは、朝九時から夜九時まで営業している小規模なスーパーマーケットだ。二十人ほどいるパートの中のリーダーでもあり、数人の正社員も林子には頭があがらないことがたびたびあった。すぐそばには全国展開のショッピングモールもある。そちらの方が時給もいいし、作業も分業化されているから仕事は楽だ、と言って移っていく人も多かった。時給は高い方が良いに決まっていますが、新たに仕事を覚えるのが面倒な林子はそのまま居続けている。それにどこにいつてもパート同士や社員とのいざこざはある。ここなら、年長でベテランの林子には遠慮する同僚も多いから、かえって気楽でいられた。

林子の仕事内容は幅広い。話し相手が欲しい老人の相手をすることもあるし、苦情を聞き入れて頭を何度も下げることもある。宅配便の手続きもするし、品出しをしたり、賞味期限の確認をする。人手が足りないと総菜を作る補助に回ったりすることもある。やる気があつて仕事熱心だと言われると、戸惑いを覚える。そもそもやり甲斐など感じていないし、求めたもいなかった。過ぎていく時間をこのスーパーマーケットに身を置いていただけだ。

子供が成長して手がかからなくなったときに、林子は再び働き始めることにした。独身の

頃は小中学生の英語の塾の講師をしていて、そこそこ人気もあった。学生時代には二年ほどの留学経験もあるし、TOEICは八百点以上ある。それを活かした仕事探しをしたが、世間は甘くはなかった。子育て中に彼女のキャリアはゼロになっていた。知らないうちに何者かによって自分の大切なものは奪われていることに気づいた。積み上げたものは僅かだったかもしれないが、無くなるものではないと信じ切っていた自分が楽天的過ぎたようだ。就職活動を諦めた彼女の目に入ったのは、スーパーのパート募集の張り紙だった。しばらくの間、その前で佇んだ。迷っていたわけではなかった。これしかないのだ、と自分に言い聞かせる時間が必要だった。

店を閉める作業を終えて、裏手の駐車場に止めてある車に乗り込んだ。十年前に新車で購入した車はあちこちが傷み始めているが、買い換えるのも新たにローンを組むのも面倒でそのまま乗り続けている。家まではバスも通っていないし、自転車は雪の季節には乗れないし、歩くには遠すぎた。

(あんなところにマンションを買うべきじゃなかった)

車を降りた林子は自宅であるマンションを恨めしい思いで見上げた。

結婚を機に買った中古のマンションは築五十年に迫ろうとしている。林子はじっくりと家を選びたかったが、十五歳年上の夫は早く持ち家が欲しかったらしくほとんど即決だった。それでも自分たちのものとなった家にはそれなりの喜びも馴染みもあった。だが、予想もなかったほどのスピードで周辺地域の過疎化ははじまり、空き家も目立つようになり、夜になるとあたりはすっかり暗くなった。当然地価もマンションの値段も下がった。

玄関に入ると萌音の履き込んだスニーカーに出迎えられた。彼女の部屋からは音楽と話し声が混ざり合った音が低く聞こえてきた。同時に林子の鼻をかすめる線香の匂いは夫の部屋からだ。彼には《神》という寄り辺があり、部屋に置かれた小さな仏壇に線香を供え手を合わせれば全てがおさまる。新興宗教三世の彼にとって、信仰する神は絶対的な存在である。林子は結婚するとき彼の神を信奉することはないし、実家は典型的な仏教で、自分が生きている限り墓守をしなければならない、と強く言った。

家庭に宗教は持ち込まない、その結婚の条件を彼は聞き入れた。そして自室で一人静かに祈り続けている。彼の母親が亡くなったときの葬儀は、その宗教色に強く染められたものだった。初めてその光景を見た林子は驚いたし、まだ小さかった萌音は太鼓の大音量にひきつけを起こしそうなほど目をひん剥いていた。

夫が部屋で線香を焚くのはいつもではなかった。どんなタイミングで焚くのかもわから

ないし、その意味を知りたくもなかった。一昨年七十歳を機に仕事を辞めたが、日中何をしているのかもわからなかった。両親は一人娘の結婚相手がひと回り以上も年上で、離婚歴もあることにずいぶん反対したし、林子もそれを気にしていないワケでもなかった。彼の勤めるエージェント会社には定年制がない職場で、長く働けるから心配ない、という言葉信じただのだ。

(死ぬまで働く、と豪語していたくせにあっさり辞めるんだから)

台所に入ると、予想に反してシンクに汚れた食器は置かれていなかった。洗いかごにマグカップや皿が水滴をつけたまま伏せてあった。少しだけ気分を良くして冷蔵庫を開けると、割引シールの貼られたプリンがふたつあった。萌音がときどき買ってくる。そのシールは林子のスーパーのものよりも控えめで洒落たデザインで形も小さかった。

「ねえ、お尻になんかついてるけど」

いつのまにか萌音が後ろに立っていた。えっ、どこ？ と振り返ってみるものの、身体は以前ほど上手くひねることが出来なくなっていた。固くなった身体に落胆していると、見かねたように萌音が手を伸ばしてきた。ジーンズの後ろポケットのあたりに何かついていていた。

「なんで割引シールがついてんの？」

さつき、貼ろうとしてお客に止められたあのシールだ。何かの拍子に紛れてそんなところについたに違いない。

「それも半額シールだよ。ママも半額になったってこと？」

萌音は無邪気に笑った。久しぶりに見る娘の笑顔はやはり可愛らしい。プリンを食べながら、林子はスーパーで見かけた女のことを話した。

「半額シールの方は自分で、そうじゃない方は誰かに頼まれたんじゃないのかな。賞味期限内に厳しい神経質な人とかにさ」

「賞味期限を気にする人はいるけどね。割引きしたって味は変わらないのに」

林子がそう言うのと萌音は真顔で答えた。

「そういう人ばかりじゃないよ。気にする人ってモノに対して気持ちが深いんだよ。安くなつてると簡単に買ったりするけど、食べ切れないで捨てることだってある。だけど、正規の値段で買ったらちゃんと味わうと思うんだ。割引されたものって軽く扱われる気がするんだよね」

そんな考えは少しも浮かばなかった林子は、スプーンを持つ手を止め娘の顔を見た。そんなことを言う彼女はまるきり子供でもないのだな、と少し安心した。二年浪人したあげく大

学を一年留年し、就職するのかと思いきや大学院に進むと言い出した。学生気分そのままのせいか中学生の頃と何も変わっていなかった。相変わらずアニメオタクで、男っ気もなく、勉強は出来るがそれを活用する方法は知ろうともしていなかった。

食べ終わった萌音は立ち上がった。

「プリンありがとう、いつも悪いわね」

林子が声をかけると、萌音はぼかんとした顔をした。

「ママが買ってきてたんじゃないの？」

彼女たちは顔を見合わせた。と同時に口を揃えた。それも小声で、パパ、と。

萌音は夫の部屋の方向へ目を向けてから言った。

「ねえ、今までのプリンやコーヒーゼリーもそうなの？」

「てつきり、萌音が買ってきたと思ってたよ」

「あたしはママが買ってきたと思ってた」

萌音は後味の悪いような表情を浮かべ、低い声で言った。

「なんか微妙」

「なにが？ 誰が買ったっていいじゃない」

「割引シールが貼っているものばかりだもん。割引になっているから買ってきたってことでしょ」

さつきまで林子の身体にくっついてた割引シールは、小さく丸まってテーブルにへばりついてた。いつから自分は割引されるようになったんだろう、そんな思いが過った。

「いいじゃないの。廃棄されるよりいいんだし、地球に優しいよ」

「だからさあ、そういうこと言ってるんじゃないよ」

萌音はそう言うとうちの部屋に入った。娘と夫は会話をするどころか、顔を合わせることもほとんどない。林子の夫に対する気持ちが娘にも伝染していることは気づいている。別々の方向を見ている三人が仕方なく同じ家に住んでいるということも。それが死ぬまですつと続くということも。

夫は彼女のことをりんこさん、と呼ぶ。結婚した当初からそうだった。礼儀正しさとも言えるが、常に他人行儀なのだ。そんな夫のプロポーズは強引で、当時結婚を焦っていた林子には都合が良かった。後から彼の神が結婚を強く推奨しているものであることを知った。結婚はタイミングだと言うが、そこに明確な打算が加わり、その結果が今なのだ。

「スーパのおばちゃん」

珍しく夫が軽口をたたいた。馬鹿にするというほどでもなく、慣れ親しんだように言った。新鮮味すらあった。だが、そういう言い方はやめて、と言いつ放った。夫の悲しそうな顔は今でも覚えている。

林子は空になったプリンのカップを弄びながら、一〇% of f と書かれたシールを見つめた。食べて良いと言われてもいないのに勝手に食べていた自分と、そのことに何も言わない夫に腹が立った。

夫の部屋の前まで行きノックをしようとして、やめた。新婚時代、夫は花束を抱えて帰ってきたことがある。取引先で貰ったのだと言った。自分に買って来たのではないのだとわかれると、がっかりした。もしかしたらあの花束も買って来たものだったのかもしれない。いや、そんなはずはない、と踵を返した。

冷蔵庫のプリンやゼリーは彼なりの優しさなのかもしれないが、それは割引されているものなのだ。急に口の中に残るプリンの甘さにイライラして、歯を磨きに洗面所に向かった。萌音の部屋から聞こえてくる音楽は誰の曲なのかはさっぱりわからないし、線香の匂いは増々濃くなってくる。この状況をなんとか変えたいと思っても、良い考えは浮かばない。ミントの味のする歯磨き粉がそんな考えすら打ち消してくる。それでいいんだ。それしかないんだ、と林子は鏡の中の自分に言い聞かせた。

【完】